

# 「汝が爺に」

——『源氏物語』 柏木巻における白詩引用論再考——

岸 ひとみ

【要旨】『源氏物語』 柏木巻において、光源氏が初めて不義の子を抱いて口ずさむ「静かに思ひて嗟くに堪へたり」は、『白氏文集』「自嘲」の一節を引用していることから、「汝が爺に」は、

従来より子に対する源氏の胸中心理として捉えられている。本稿においては、源氏が「喜ぶに堪へ」を略して朗詠されたことに注目し、「汝が爺に」とはどのような意味を持つのかを再考した。

その結果、朗詠で源氏が女三の宮に向けて、未練から、不義の子を持つ父の嘆きを訴えたことにより、「汝が爺に」は、源氏から女三の宮へ、柏木に似てほしくないということだけではなかったことが判明した。この箇所が草子地であるため、語り手が、源氏はどこまで明確に意識しているかわからないが、無

理だとはわかっていても、愚かであることをわかってもらいたかっただろうにと推量したものであると解するに至った。

朗詠と草子地という二つの手法を用いることで、『白氏文集』の世界が『源氏物語』において引用を超えて機能し、源氏の女三の宮への韜晦された心情と共に交錯する深層心理を表出して、原詩とは異なる物語の深遠な世界を構築していることが浮かび上がった。

【キーワード】源氏物語、自嘲、汝が爺に

はじめに

柏木巻において、女三の宮が不義の子を出産した後に出家する。柏木は亡くなり、五十日の祝いを迎えて、源氏が初めてその子、薫を抱いて、『白氏文集』の一節を口ずさむ場面が次のように描かれている。

あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなさも思しつづけられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日は事忌すべき日をとおし拭ひ隠したまふ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。五十八を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いとものあはれに思さる。「汝が爺に」とも、諫めまほしう思しけむかし。

（『新編日本古典文学全集』 柏木巻237頁）

この「静かに思ひて嗟くに堪へたり」というのは、『白氏文集』「自嘲」の引用であるため、「汝が爺に」とは、「勿頑愚似汝爺」のこととしている。<sup>(1)</sup> 解釈は、多くが古注を含めて、「柏木に似るな」と記されている。<sup>(2)</sup>

先行研究を確認すると、松田成穂氏は「汝が父に」という

のは、源氏が、「頑愚」ともいふべき所業によって人生を閉じ他界した柏木衛門督のことを想い起こしつつ、他方、おのれ自身の人生をも「頑愚」と言わざるをえないものとして内省するといった、実の父柏木の人生と形式上の父源氏の人生とが重ね合わされて、言わば「私たちのように」といった気持で、源氏の感懐が語られている（略）広く人間一般の根幹の問題として人間存在の中に認めざるをえない「頑愚」なるものに対して深々とした想念をめぐらしている」とされ、深沢三千男氏は「頑愚」は愚かしい情念にとらわれて、理性の歯止めを破つて破滅への道をひた進んだ柏木の性情を、端的に言外の隠し言葉として、暗黙の内に了解させる言葉であろう。（略）原詩にもっと密着すれば柏木は決して老父ではない。老父は源氏自身にほかならぬ。（略）妻を寝取られた哀れむべき偽父―源氏自身に似るなどの含意も持つ事になるであろう」と論じられている。<sup>(4)</sup>

このように従来の研究史においては、原詩をこの場面に置き換えて、子に対する源氏の胸中心理として捉え、「汝が爺に」は、「頑愚に似てはならぬ」と解している。<sup>(5)</sup>

しかし、引用であるからといって、原詩をそのままスライド

させて解釈を導いてよいのであろうか。「汝が爺に」の箇所は草子地で、源氏が直接口にしたのは「静かに思ひて嗟くに堪へたり」である。

「汝が爺に」について、依拠する漢詩を源氏が朗詠したことに注目して、「汝が爺」とは、誰を指すのか、「似ること勿れ」とは、何に対するものかを再考したい。

### 一、「汝が爺に」の基底

「汝が爺に」は従来から一貫して原詩を忠実に踏まえて、父から子への思いとして捉えている。この箇所は草子地のため、語り手から読み手に対するメッセージであり、薫、女三の宮、ましてや源氏自身にすら聞こえていない言葉である。しかもこれが引用であることから、さらに解釈の幅を広げることになる。本論では、原詩からではなく、物語の中でどのような位置付けとなっているのかを探ることを起点としてこの語句を解したい。つまり、なぜ語り手がこの場面において「汝が爺に」という言葉を選んだのかということである。

そのためには、この前に朗詠された「静かに思ひて嗟くに堪へたり」が、どういう意味を持つものかを、まずは確認すべき

である。

『源氏物語』で漢詩を引用している用例のうち、本用例においてのみ草子地で「五十八を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いとものあはれに思さる」と、『白氏文集』の一節であることを明記している。白楽天の子への思いを想起させ、「あはれ」という言葉で白楽天とあたかも同じような気持ちだと受け取れる表現となっている<sup>6</sup>。この部分だけを見ると、ここまで原詩にこだわっているのであるから、それを出発点として解釈するという立場も可能である。しかし、あくまでも物語に沿って解釈するとなると、そうとは限らない。むしろ、それゆえにこそ原詩とは異なる世界を構築しているともいえそうである。

また、源氏の「静かに思ひて嗟くに堪へたり」という朗詠の前には、源氏が薫を抱いて顔を凝視している。続いて、「汝が爺に」とも、諫めまほしう思しけむかし」となっており、「諫め」ている相手は薫であり、「思す」のは源氏である。これだけを見ると、源氏が薫への思いとして「汝が爺に」と呼び掛けているように読めそうである。そうであるなら「静かに思ひて嗟くに堪へたり」という朗詠も薫を意識したものとなる。

すでに拙稿において、朗詠は、ある明確な意図を持って周りのものに聞かせるというものなので、何もわからない赤子の薫に対して朗詠したとするのは不自然である。原詩と異なり、「喜ぶに堪へ」が略されていることから、女三の宮に向けたもので、源氏が女三の宮への未練から、不義の子を持つ父の嘆きを訴えた<sup>(7)</sup>と論じた。

このように解するには、女三の宮が「自嘲」の詩を知っていることが前提となる。従来の考え方を論拠づけるものとして、女三の宮を含めてその場にいる女性は原詩を知らない<sup>(8)</sup>とされてきた。しかし、当時の平安貴族の女性がどの程度の漢文知識を持っていたかを論じることからではなく、物語の流れにおいてどう解釈するかということをベースにして、この時点では女三の宮は知識があると解した<sup>(8)</sup>。

朗詠が女三の宮に対するものであれば、「汝が爺に」は、薫に言っているように見せかけて実は女三の宮に対する源氏の思いつき<sup>(9)</sup>となつて、「柏木に似てはならぬ」と解することができる。結論は従来の注釈書と同じであるが、薫ではなく女三の宮に向けたものとする点<sup>(9)</sup>が異なる。

さらに、原詩から「頑愚汝が爺に似ること勿れ」に込められ

た語り手の意図を考える必要がある。草子地とは、字義的には「物語の中で説明のために作者の意見などがなまのままで述べられている部分」とされている。草子地論の先行研究で、小西甚一氏が、草子地を「視点」という観点から論じて、草子地によって享受者を作中人物の心から「離れ」を持たせるとして、「離れ」がきわめて大きくなると、享受者は、作中人物が自分で意識していない心を、享受者の立場から把握することさえ可能となる<sup>(10)</sup>とされている。

語り手は当事者が知りえない未来の事実をわかっているだけでなく、本人が明確に意識していない深層心理にまで入り込むことができる。

以上を踏まえて、次章では頑愚「汝が爺に」とは、どのような意味があるのか見ていきたい。

## 二、頑愚「汝が爺に」とは

まず「汝が爺」とは誰であるのか見ていきたい。先行研究は既述のとおり「汝が爺」を源氏と柏木両者として、「頑愚に似ること勿れ」としている。薫にとつて源氏も父であり、柏木は老父ではないということで、あくまでも薫視点で、原詩からの

アプローチとなつてゐる。

「頑愚」とは、字義的には、「頑なで愚かなこと」とされてゐる。松田氏は柏木と源氏を重ねて一体的に捉え、深沢氏は両者を区別して「頑愚」を論じられてゐる。

本稿では源氏の女三の宮に対するものであることから、この場面において源氏視点で、誰の「頑愚に似ること勿れ」かを読み取らなければならない。

そこで、まず柏木について見ていきたい。源氏が柏木に対してどのような意識を持っているかと言へば、朗詠の前に「あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなごも思しつづけられて、涙のほろほるとこぼれぬるを」（柏木巻323頁）とあり、後に「あはれに惜しければ、めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれたまひぬ」（柏木巻324頁）となつてゐる。柏木を哀惜しているので、柏木が愚かであるという意識はこの時点ではない。密通発覚当時は「おほけなし」と評していたが、柏木が亡くなり、薫が生まれた後は意識が変化している。松田、深沢両氏ともに、柏木が密通という愚かな行為によつて身を滅ぼしたことから、柏木も「頑愚」の主体であると捉えている。しかし、この場面では、源氏はそう思つて

いない。源氏が女三の宮に対して訴へているとなれば、この時点で限定して見ていかなければならない。

次に源氏自身においては、どのように捉えたらよいか見ていく。「頑愚」については、「汝が爺に」の本文に続く次の「をこなり」に注目した。「をこなり」というのは、字義的には、「愚かではかけてゐるさま。たわけてゐるさま。愚か。ばか」とされてゐるので、「頑愚」に通じる語句である。

この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそねたけれ、をこなりと見るらん、と安からず思せど、わが御答あることはあへなむ、二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ、など思して、色にも出だしたまはず。

（柏木巻324頁）

源氏は女房に、薫が柏木の子であることも知らず喜んでいるから愚かだ、と思われていると意識している。「をこなり」という言葉は、限定的な使われ方をされているため、この場面では使われた「をこなり」は重い意味を持つものである<sup>(12)</sup>。

松田氏は柏木と重ねた源氏の人生を、深沢氏は密通された源氏自身を顧みて、「頑愚」としている。原詩の「頑愚」は白楽天の人生を振り返つて総体的に自分を評しているが、それに引

きずられているといえよう。本稿は、源氏の意識が薫ではなく女三の宮に向かうことで、「頑愚」とする意識の射程が異なる。つまり、これから成長していく薫であれば、自分の人生を振り返って父としての思いとなるが、女三の宮であれば、現時点における自分と女三の宮との関係性から「頑愚」を見つめることになる。

以上により、「汝が爺に」は、女三の宮を意識した「源氏の頑愚に似ること勿れ」で、「頑愚」とは、「をこなり」と思われていることであるといえよう。<sup>(13)</sup>

次に、源氏が女三の宮に対して「汝が爺に」とは、具体的にどのような思いを読み取ることができると見えていきたい。

### 三、女三の宮に対する「汝が爺に」

まず源氏の女三の宮への思いを押えるにあたり、なぜこの場面「をこなり」という意識が上るのか見ておきたい。

愚かであると思うのは、源氏が密通の事実を知らないと思っ  
ている女房である。薫が生まれてからは、「大殿は、いとよう人目を飾り思せど」(柏木巻300頁)と、人前では薫の誕生を喜んでいるように見せかけていたので、その時点で「をこなり」

と思われているという意識を持つてもおかしくはない。ここで源氏が薫に対する意識は、「この君、いとあてなるに添へて愛敬つき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ」(柏木巻323頁)と、初めて薫の顔をじっくり見て愛しく思っている。生まれた頃は「まだむつかしげにおはするなどを、とりわきても見たてまつりたまはず」(柏木巻300頁)と、可愛がることもなかった。よって、源氏が薫を抱いて慈しむ姿を人に見せるのは、今までなかった。

「をこなりと見るらん」というのは、源氏が薫を実の子だと思つて実際に愛おしむ姿に対するものである。祝いの宴を催したり、薫の乳母に養育について細かに指示したりして、単に大事に思っているだろうという源氏の姿は当てはまらない。しかも薫に愛情がない間は父としての気持ちもないので、我が子でないのにそうとも知らず喜んでいるという意識すら持たないであろう。ゆえに、ここで「をこなり」という意識を持つに至った。

さらに「をこなり」という言葉が登場したのは、朗詠直後であることに着目したい。これは源氏自身が「自嘲」詩全文を想起したことで、「頑愚」という語句から「をこなり」という意

識が頭在化したと解したい。

朗詠前に女三の宮の氣を引こうとしても通じず、次に薫を出しにして「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と朗詠した。これは几帳で隔てられた女三の宮に対して、唯一源氏が思いを伝える方法だった。「柏木の子であることを思つて私は嘆いている」という中には、事情を知っている女房は自分のことを笑つてゐるのを死ぬまで耐えていかなければいけないという嘆きも含まれてゐる。<sup>(7)</sup>

続いて「わが御答あることはあへなむ、二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ、など思つて、色にも出だしたまはず」(柏木巻324頁)と、詮索すれば密通の事実が露見し、女三の宮が密通して不義の子を産んだことを笑われるので、自分と女三の宮の立場を比較すると、女三の宮の方がかわいそうだという意識になつてゐる。ここに源氏が女三の宮を愛しむ情が表れてゐる。

この意識は、自分が「をこなり」と思われることと、女三の宮を守ることが密接な関係にあることを示している。自分が「をこなり」と笑われるのを耐えるのは、源氏自身の保身のためということも否定はできないが、女三の宮を大切に想つてい

るからである。自分のことだけを意識してゐるのであれば、「女の御ためこそいとほしけれ」とはならない。

このような思いから、女三の宮に「汝が爺に」として、自分が「頑愚」であることを訴えて情をかけてほしいと思つたのはなかつたかと推量される。

次に、この思いは女三の宮にどのように受け止められると思つたのか、次の一文から推測してみたい。

人々すべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて、「この人をばいが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはず。

「誰が世にか種はまきしと人間はばいかが岩根の松はこたへむ

あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。ことわりと思せば、強ひても聞こえたまはず。いかに思すらむ、もの深うなどはおはせねど、いかでかはただには、と推しはかりきこえたまふも、いと心苦しうなむ。(柏木巻324頁)

女三の宮が源氏の歌を聞いて何も返事をせずにつつ伏してし

まつたことに対して、「もの深うなどはおはせねど、いかでかはただには」と、女三の宮は深い分別もないと思つてゐることから、自分が「頑愚」であることを訴えてもその真意を理解できないと思つてゐるであらう。

以上から、女三の宮に自分は「頑愚」と思われて辛いという気持ちを感じて、情をかけてもらいたいと思つ一方、どういつても自分の思ひはわかつてもらえないだらうという二つの思ひが潜在してゐた。

#### 四、透視される女三の宮への「汝が爺に」

女三の宮に対する「汝が爺に」が、女三の宮の視点ではどのように意識されることになるのか見ていきたい。女三の宮は、源氏に薫が自分の子でないことを知られてゐるとわかつてゐるので、源氏のことを愚かとは思わない。それでは女房に愚かと思われていることまで意識があるかと言へばそれは疑問である。そういう意識を持つためには、前提条件として、密通の事実を知つてゐる女房が他にもゐることと、さらにその者が源氏は知らないと思つてゐなければならぬ。この点について、女三の宮がそういう女房の存在があることまで意識できたかは物語の

中では明らかにされてゐない。

まず、密通を助けた女房が他にもゐることについて、密通の際には「人召せど、近くもさぶらはねば、聞きつけて参るものなし」(柏木巻24頁)と、本来であれば近くに控えてゐるはずの女房が誰もいなかった。また、密通後に柏木が帰る際にも誰も登場せず、無事に柏木は誰からも咎められることなく帰つて行つた。さらに、密通後も「かの人は、わりなく思ひあまる時々は夢のやうに見たてまつりけれど」(柏木巻23頁)と、密会が繰り返されてゐる。女三の宮にいか分別がないと言つても、これらすべてが小侍従一人で可能にしたとは思われないであらう。本来いべき女房がいけないことは不自然であり、そこに何らかの意図的なものを感じ取るはずで、密会を可能にするには小侍従の協力者がいないと無理である。そうすると、他に密通を知つてゐる女房がいるかもしれないという程度は思つてゐるであらう。

次に密通を知つてゐる女房が、源氏には知られてゐないと思つてゐることについて見ていきたい。源氏に知られてしまつたことをわかつてゐる者は、物語の中では唯一小侍従だけとなつてゐる。その小侍従が他の女房に密通のことを話すとは考

えにくい。源氏を恐れ、源氏自身も知らないふりを通しているのに、密通があったことや、まして源氏に発覚したことを漏らせば大変なことになる。乳主としてどれだけ責められることになるか自分が一番よくわかっているはずである。自分と柏木との関係も源氏はお見通しであり、何かあれば真つ先に疑われるのは自分であるという自覚は持っているであろう。

源氏自身は、心の中は様々な葛藤があるが、表向きは「人にはけしき漏らさじと思せば」（柏木巻298頁）と、自分が知ってしまったことをひた隠しにしている。「おほかたのけしきも、世になきまでかしづききこえたまへど」（柏木巻300頁）、「大殿は、いとよう人目を飾り思せど」（柏木巻300頁）と、周囲の人々から疑念がもたれないように細心の注意を払っている。

そうなると、密通の事実を知っている女房は他にもいるが、その者は、源氏には気づかれていないと思っていることになる。そういう女房が、薫を抱く源氏を見て「をこなり」と思っているだろうとは、女三の宮は思ひもしないであろう。密通後はひたすら源氏を恐れ、冷たい仕打ちに耐え、出家をしてこの世での柵を断つたので、源氏に対して距離を置いている。それゆえにこそ、「かかるさまの人は、ものあはれも知らぬものと聞

きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」（柏木巻322頁）と言葉を返した。源氏の心をくみ取ろうという気持ちはもはやない。ゆえに、「をこなり」とは思わない。

以上の点から、源氏は、女三の宮に辛い自分の気持ちを汲み取ってほしいと思う一方で、大した分別もないので、その思いはわかってもらえないだろうと思った。他方、女三の宮は分別の問題ではなく、源氏から心が離れて思いを寄せることはなかったので気持ちを察しようとしていない。語り手が源氏の意識を推し量り、それに対する女三の宮がどのような思いであるかを汲み取ることで、逆に源氏こそが女三の宮の気持ちを思い遣ることができず「頑愚」ではないかと語り手は暗示しているとも解したい。

### おわりに

従来の研究史では、「汝が爺に」を薫に対する源氏の胸中心理として捉えてきたが、本論では「喜ぶに堪へ」を略して朗詠したことに注目し、これは女三の宮に向けて、源氏が女三の宮への未練から、不義の子を持つ父の嘆きを訴えたものと捉えた。

そこから、草子地であることに注目することで、「汝が爺に」は、源氏は女三の宮を意識して「柏木に似るな」と訴えていることにとどまらなかった。薫に諫めているように見せかけて、女三の宮にわかってもらえないだろうと思いつつも、愚かな自分も訴えて辛い思いを察してもらいたかったのであろうにと、語り手が源氏の思いを推し量ったことが判明した。さらに女三の宮の視線で捉えることで、語り手しか知りえない源氏の「頑愚」が暗示された。

朗詠と草子地という二つの手法を用いることで、『白氏文集』の世界が『源氏物語』において引用を超えて機能し、源氏の女三の宮への韜晦された心情と共に深層心理を表出させて、原詩とは異なる物語の深遠な世界を構築していると考えられる。

〔注〕

(1) 原詩は次のとおりである(『白氏文集』巻五十八 二八二—  
白文は那波本を参照。書き下しは、『新釈漢文大系』をもと  
に一部手を加えた)。

自嘲

五十八翁方有後 五十八翁 方に後有り

靜思堪喜亦堪嗟

靜かに思へば喜ぶに堪へ 亦嗟くに堪

へたり

一珠甚小還懸蚌

一珠甚だ小にして 還た蚌に懸ち

八子雖多不羨鴉

八子多しと雖も 鴉を羨まず

秋月晚生丹桂實

秋月晚くに生ず 丹桂の實

春風新長紫蘭芽

春風新たに長ず 紫蘭の芽

持盃祝願無他語

盃を持ちて祝願するに 他の語無し

慎勿頑愚似汝爺

慎んで頑愚 汝が爺に似ること勿れ

(2) 注釈書は次のとおりである。

・実父柏木に似てはならぬと、源氏は思ったはず。前引の漢詩によって、語り手が推測。

(『新編日本古典文学全集』 柏木巻323頁)

・汝の父柏木に似ないやうにと源氏は薫に注意を與へたいお氣持だつたらう。

(池田龜鑑氏『日本古典全書』 柏木巻251頁)

古注については次のとおりである(『細流抄』、『萬水一露』は『源氏物語古注集成』(おうふう)、『湖月抄』は『源氏物語古注釈大成』(日本図書センター)を参照)。

・楽天か句を引て柏木の事をしたにふくめり薫に対して実父に似そとおほすらん草子地をしはかりていへる也此かきさまなどこそ此物語の第一と云へきと也(『細流抄』)  
・此かほるを柏木に似たるなど、はの給た、おほしめせと

も不思議なる密通の事なればえの給はぬとおほしけんか  
しとは双紙（ま）の批判の詞也此こゝろも樂天か汝か父に似る  
事なかれといひし心をとりてかける也 河海弄花同之

（『萬水一露』）

・樂天汝が父に似る事なかれと作れる心は卑下なり。源氏  
御心には柏木に似る事なかれとおほしけんかしと也。

（『湖月抄』師説）

(3) 松田成穂氏「柏木卷に関する一・二の問題——なんぢがち  
ちに——」『平安朝文芸論——源氏物語を中心に』（笠間書  
院）二〇〇一年六月（初出『金城国文』第四十一号一九六八  
年八月）

(4) 深沢三千男氏「五十日の祝」『講座 源氏物語の世界』（第七  
集）（有斐閣）一九八二年五月

(5) 前掲松田成穂氏、深沢三千男氏論文以外のものとして、山本  
淳子氏「光源氏の「自嘲」——『源氏物語』柏木卷の白詩引  
用——」『中古文学』第九十二号 二〇一三年十一月もある。

(6) 『源氏物語』では、「うち」誦す・誦すの用例五十二例の  
うち、漢詩を引用したものは十五例となっている。本用例以  
外はすべて漢詩の引用語句しか記載されておらず、その出典  
の手がかりは語句からだけである（『ジャパンノリッジ』お  
よび『源氏物語大成』を参照）。

(7) 拙稿「静かに思ひて嗟なげくに堪へたり」——『源氏物語』柏

木卷の白詩引用論再検討——」『同志社女子大学大学院 文  
学研究科紀要』第十七号二〇一七年三月

(8) 女三の宮は、源氏から「いはけなし」、「幼し」、「うつくし」  
などと評されていたが、朱雀院から頼まれたこともあり、女  
三の宮に対して源氏が直接琴を教えるなどして、女三の宮の  
教育に力を入れている。ゆえに、それ以外においても、皇女  
二品、源氏の正妻としてふさわしい教養を身につけてい  
るはずである。源氏自身「さるべき書ども、文集など入りた  
る箱、さては琴一つ所持せたまふ」（須磨巻176頁）と記載  
されているように、須磨に流謫されたときも『白氏文集』を  
持つて行ったほど愛好していたのであるから、この時点では、  
女三の宮は、乳母や選りすぐりの女房を含めて『白氏文集』  
についての知識を持っており、「自嘲」は知っていると解し  
た。「自嘲」は『田氏家集』一二七「吟白舍人詩」の第三句  
「應是戊申年有子」の自注で、「唐太和戊申年。白舍人始有男  
子。甲子與余同」と記されて、白樂天に始めて生まれた男子  
と年齢が同じであると、第四句で「付於文集海東來」とし  
て『白氏文集』とともに海の東の国、日本に来たことを詠ん  
でいる。このことから、「自嘲」の詩を念頭に置いたことが  
読み取られ、当時有名だったと思われる（『田氏家集』本文  
は、群書類従本を参照）。

(9) 前掲拙稿で、「柏木に似てはならぬ」と解することで、朗詠

後に源氏が女三の宮に話しかけた言葉に、どのような隠された意味があるのかを論じた。

(10) 小西甚一氏「源氏物語の心理描写」『源氏物語講座』第七卷

(有精堂出版) 一九八一年九月

(11) 「をこなり」に注目した注釈書は、次のとおりである。ただし、罪意識に苦しむ自分を「頑愚」としている。

「汝が爺に」とは、「をこなり」と人に見られているであろうと推測する、源氏自身を指し、それと同時に、短命で逝ってしまった実父の柏木をも暗示する。

(『源氏物語注釈』柏木巻84頁 風間書房 二〇一〇年十

二月)

(12) 『源氏物語』では、「をこなり」の用例は、十七例である

(『ジャパンノリッジ』および『源氏物語大成』を参照)。もしこういう行為をしたら「をこなり」であろうと仮定した場合やある特定の行為、姿に対するものが多い。源氏の人そのものに対するのは本用例を含めて二例であるが、他の一例は次のとおり空蟬からのもので仮定文である。本用例のみが、人から実際に評せられる「をこなり」である。

本意の人を尋ねよらむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなうをこにこそ思はめと思す。(空蟬巻125頁)

(13) 「をこなり」に関連する意識として「咎」がある。「咎」から導き出される「頑愚」があるかどうかについては、別稿に譲りたい。

(14) この場面での女三の宮の心情については、前掲拙稿で論じた。